

近世後期の会話文についての分析

- 『浮世床』を中心として-

関 丞 希*

(e-mail : shmin@jwu.ac.kr)

目 次

I。はじめに	II-2。発話者別の文の長さ
I-1。研究目的	III。話題と文の長さとの関係
I-2。研究方法	III-1。話題の種類
I-3。先行研究	III-2。会話における話し手の役から
II。文の長さについての分析	IV。結び
II-1。文・文節の総数・ 一文平均文節数・文の分布	

I。はじめに

I-1。研究目的

文¹⁾の長さは個人的恣意によっても決定されるが、言語主体者に働きかける種々の条件によって、より以上に強力に決定される。そのような立場から、本稿では近世の作品である『浮世床』を研究資料として使い、その作品の文の長さについて分析を試みようとする。文の長さは一文中の文節数²⁾によって計ることとする。その時、もっとも短い文は一文節の

* 중원대학교 조교수

1) 文の定義は橋本進吉の文法に従う。つまり、文というのは内容からみれば、「纏まった完い思想を表すもの」であり、外形からみれば、「①文は音の連続である。②文の前後には必ず音の切目がある。③文の終りには特殊音調が加わる」である。(築島裕 (1987) 「橋本文法」『国文法講座』明治書院 p.48)

2) 文節の定義も橋本進吉の文法に従う。つまり、文節は①一定の音節が一定の順序に並んで続けて発

文であり、長い文としては一応無限大の文節数をもつ文が考えられる。しかし、我々の言おうとする事や理解能力には限度があるため現実にはあまり長い文はあらわれない。

樺山忠夫（1953）の「文の長さについて一条件との相関の分析一」³⁾をみると、文の長さに作用すると思われる条件について次のように述べている。

文の長さに作用すると思われる条件を大きく分類して

- (1) 推敲可能性
- (2) 場面、文脈への依存度
- (3) 年齢
- (4) 文章に働く制限
- (5) 内容、文体意識又は表現価値の五項目とすることができる。また、これ以外にも種々の条件が考えられる。

樺山忠夫の記述のように、大きく分類した五つの基準以外にも文の長さには種々の条件が関与すると思う。その関与する条件の中の一つがその文が使われている時代である。その点に着眼して、本稿は近世時代の『浮世床』の話しことばの文の長さを調査して、文の長さにおける近世的な特徴、『浮世床』の作品上の特徴を分析してみようとする。また、場面と文の長さの関係を話題や話し手・聞き手の面から捉えて、文の長さを規制する条件を考えようとするのが本論文の研究目的である。

『浮世床』で使われている言葉は主に近世後期の町で行われた、庶民の江戸語である。つまり、近世後期、江戸で使用された共用語を研究対象にしたが、それは変遷を見る上で江戸語が適当であると考えたからである。しかし、言うまでもなく、われわれは江戸語の話しことばを知ることはできない。いわゆる古典落語といわれるものでさえ、当時の話しことばをそのままに伝えていると実証する手段もない。しかし、当時の話しことばを推測する手はかりはある。それはその当時に書かれた文字言語資料のうち、江戸語によって書かれた会話文の部分である。

ただ、会話文には文字言語としての制約がある。その上、歴史的な表現様式の流れを背景に担っており、あるいは、作者の筆ぐせといったものも考慮しなければならない。また、それら会話文は、ある種の層の人々が登場するが、その人々を以ってその層の代表そのものであるということとはできない。あるいは、日常会話のある場面しか記述されていないなど、

音され、中間に音の断止がない。②文節を構成する各音節の音の高低の関係（アクセント）が定まっている。③実際の言語においては、その前後に音の切れ目をおく事ができる。④最初に来る音とその他の音、又は最後に来る音とその他の音との間には、それに用いる音にそれぞれ違った制限があることがある。（東京語で[g]は最初のみ、[ŋ]は最初以外のみ用いられるなど）（築島裕（1987）「橋本文法」『国文法講座』明治書院 p.49）

3) 樺山忠夫(1953) 「文の長さについて一条件との相関の分析一」国語学15 p.24

種々の不利な条件が考えられるわけではあるが、これらを十分考慮に入れた上で近世の調査資料を選ぶとすれば、まず、洒落本・滑稽本・人情本などが調査の対象としてのぼってくる。

今回の調査では、これらの中、式亭三馬の滑稽本『浮世床』（文化8-9刊）を調査対象として取り上げた。『浮世床』を選んだ理由は次のようである。

- ① 式亭三馬は当時の会話を比較的忠実に写実しようとする態度をとっている。
- ② 『浮世床』にはかなりの人数が登場している点、調査の上で適当である。
- ③ 『浮世床』は近世後期の江戸の庶民のことが使われている。

また、本研究の学術的な意義は次のように整理できると思う。

- ① 話しことばにおいて、文の長さを調査することによって、文の長さを規制するもろもろの傾向を早く明らかにすることができる。
- ② この調査が文の構造を調べる糸口的調査であるという点で、話しことばの基礎的な調査として重要だと考えられる。
- ③ 現代語ではなく、江戸語の会話文についての分析で、変遷の研究にも役立つ。
- ④ 江戸語の会話文の分析は江戸語の特徴および滑稽本『浮世床』の特徴を理解することにおいても役立つ。

I - 2. 研究方法

近世後期の作品である『浮世床』を調査の資料として扱っているが、『浮世床』の登場人物のうち、江戸人と目し得ぬ孔糞（田舎の儒者）、作兵衛（大阪商人）、うば（越後者）、および、読本を声を出して読む個所などは調査対象から除外した。また、川柳、漢籍の語句などの「といふ」の形で引用されたものは、調査対象に含めた。

なお、発言者が明らかでないものは発言者別の調査の際は除外した。

また、『浮世床』の文の長さを分析するため、次のような過程によって考察を進めようとする。

- ① 『浮世床』の文の総数、文節の総数、一文平均文節数を調査する。
- ② 『浮世床』の一文を成している文節数による文の分布を調査する。
- ③ 『浮世床』の発話者別の文の長さを調査する。そして、文の長さと言話者別特徴との関係を把握する。
- ④ 話題と文の長さとの関係把握のため、『浮世床』の話題の種類を調査する。そして、話題の種類による一文平均文節数を把握する。
- ⑤ 話し手の役がらが文の長さにとどのぐらい影響を与えるかを把握するため、『浮世床』の会話において話し手と聞き手がどのような立場で話を進行しているかを調査し、それを三つのグループに分ける。

そして、それぞれのグループの話し手の一文平均文節数を把握する。

I-3. 先行研究

現代語の話しことばの文の長さについては種々の調査が行われており、特に、国立国語研究所(1955)が1952年～1953年に行った談話語の実態調査では、一文の平均文節は3.81文節であった。この調査は東京で行われたものである。この3.81という数は、実際の談話の場面を採集した録音テープ18巻の総文数10,118から得られたものである。なお、この調査では、採集地区、生活環境、性、年齢、教養、相手の人数、相手の既知・未知・談話の基礎話調、談話の目的、態度などによって多少文の長さに変動があることが報告されている⁴⁾。

また、文のジャンルと文の長さとの関係を把握しようとする研究も広く行われた。例えば、石野博史(1972)は「文の長さ・ローカルニュース文章の分析」⁵⁾でニュースの文の長さを、岩淵悦太郎(1967)は「新聞文章の変転の方向」⁶⁾で新聞の文の長さを、長田久男(1960)は「こども漫画に多い話し方」⁷⁾で漫画の文の長さを分析した。

現代語ではなく、近代や近世・中世の文の長さについて研究した先行研究としては、まず、近代の作品を資料として考察した野尻久美子(1972)の『樋口一葉と「たけくらべ」会話の表現と一文の長短」⁸⁾、瀬川武美(1984)の『志賀文学における文の長さの変化—即物性との関係において—』⁹⁾、和田弘名(1997)の『「伊豆の踊子」における文の長さの規則性』¹⁰⁾などがある。近代作品の特徴を考慮しながら、文の長さについて考察し、現代語の文の分析とは異なる有意義な成果をあげている。

古典を資料として文の長さを調査した先行研究としては鈴木一彦(1998)の『文の認定と文の長さ—平安初期から鎌倉初期まで—』¹¹⁾があげられる。鈴木一彦は平安時代から鎌倉時代までの文の長さについて史的にその変化に注目して述べている。文の長さの変遷に注目した点は高く評価されるべきだと思う。

本稿はこのような文の長さについての先行研究を踏まえ、特に近世後期の代表的な滑稽

4)国立国語研究所編(1955)『談話語の実態』国立国語研究所報告8 国立国語研究所 pp.7-9

5)石野博史(1972)「文の長さ ローカルニュース文章の分析」文研月報22-11 日本放送協会放送文化研究所 pp.12-31

6)岩淵悦太郎(1967)「新聞文章の変転の方向」新聞研究195 日本新聞協会 pp.5-22

7)長田久男(1960)「こども漫画に多い話し方」言語生活107 筑摩書房 pp.24-42

8)野尻久美子(1972)『樋口一葉と「たけくらべ」会話の表現と一文の長短』解釈18-09 pp.36-51

9)瀬川武美(1984)『志賀文学における文の長さの変化—即物性との関係において』帝塚山学院大学研究論集19 帝塚山学院大学 pp.11-29

10)和田弘名(1997)『「伊豆の踊子」における文の長さの規則性』青須我波良53 帝塚山短期大学 pp.137-143

11)鈴木一彦(1998)『文の認定と文の長さ—平安初期から鎌倉初期まで—』東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 汲古書院 pp.32-46

本である『浮世床』の会話文の文の長さについて考察しようとする。近世後期の文を研究の対象としたのは、近代の文についての研究は先行研究で紹介したように、作品別に研究が進んでいるのに対して、近世の文についての研究はあまり進んでいないからである。また、その点において、本稿の近世後期の『浮世床』の文の長さについての研究結果は先行研究の結果と対比され、有意義性を帯びると思う。

II. 文の長さについての分析

本論文のII章では、『浮世床』の会話文の一文平均文節数を把握し、一文平均文節数による文の分布を調べようとする。『浮世床』の会話文の文の長さの把握によって、『浮世床』の会話文の特性を理解し、近世後期の会話文が現代の会話文にどれほど類似しているかを調べようとする。この研究結果は、『浮世床』という近世後期の作品性格を正しく理解するに役立つと思う。

II-1. 文・文節の総数・一文平均文節数・文の分布

<表1>からわかるように、『浮世床』の一文平均文節数は3.98である¹²⁾。各巻ごとに見ると3.18(初編上)から4.97(二編上)までの幅を持っている。

国立国語研究所の日常談話語の一文平均文節数が3.81であること¹³⁾に比較すれば、『浮世床』の会話文の文の長さは現代より少し長い、それほど差はない。つまり、近世後期の会話文の長さは現代の会話文の長さに近接していたと言える。

<表1> 文・文節の総数・一文平均文節数

		文の総数	文節の総数	一文平均文節数
全体		3509	13964	3.98
内 訳	初編上	1140	3624	3.18
	初編中	470	1854	3.94
	初編下	695	2776	3.99
	二編上	349	1736	4.97
	二編下	855	3947	4.62

また、<表1>からみると、初編より二編の方で、一文平均文節数が長い傾向が見られ

12)一文節文、二文節文を除外した『浮世床』の一文平均文節数は4.65となる。

13)国立国語研究所[編](1955)『談話語の実態』国立国語研究所報告8 国立国語研究所

る。そのような傾向の原因については、[Ⅱ-2]や[Ⅲ-1]章で後述するが、一つ目の原因は一文平均文節数が長い発話者が二編に多く配置されていることにある。もう一つの原因は話題の種類や話しの役がらによって分類した「第一グループ」の会話が二編に圧倒的に多いことである。

<表2> 一文文節数による文の分布

一文 文節数	浮世床	一文 文節数	浮世床	一文 文節数	浮世床
1 ¹⁴⁾	32.03% (1124)	2 ¹⁵⁾	18.18% (638)	3	11.40% (400)
4	9.63% (338)	5	7.41% (260)	6	4.99% (175)
7	3.65% (128)	8	2.71% (95)	9	2.22% (78)
10	1.42% (50)	11	1.31% (46)	12	0.88% (31)
13	0.80% (28)	14	0.51% (18)	15	0.37% (13)
16	0.17% (6)	17	0.34% (12)	18	0.34% (12)
19	0.17% (6)	20	0.23% (8)	21	0.17% (6)
22	0.03% (1)	23	0.08% (3)	24	0.06% (2)
26	0.14% (5)	27	0.11% (4)	28	0.08% (3)
29	0.06% (2)	30	0.03% (1)	31	0.03% (1)
34	0.06% (2)	36	0.03% (1)	37	0.06% (2)
38	0.03% (1)	39	0.03% (1)	42	0.06% (2)
43	0.06% (2)	45	0.03% (1)	53	0.03% (1)
55	0.03% (1)	61	0.03% (1)		

14) 『浮世床』の一文節文には、「あい」「いや」「ええ」「むむ」「さうさ」「をい」「こう」「やあい」「ははあ」「をつと」「ええと」「鬢公」「お前さん」などがあった。

15) 『浮世床』の二文節文には、「あれあれ」「をやをや」「はいはい」などがあった。

<表2>からわかるように、『浮世床』には3文節文が11.40%、4文節文が9.63%、5文節文が7.41%、6文節文が4.99%であって、ふつう3から6文節文を会話文で人々が広く使用したことがわかる¹⁶⁾。

II-2. 発話者別の文の長さ

『浮世床』の主鬢五郎は作品全体を通じて重要な人物として登場しており、文の数も多い。彼の一文平均文節数は3.47であり、『浮世床』全体の平均3.98よりは少し短い。発言者の中では平均値に最も近い一人である。

一文平均文節数の最も短いのは、あだ文字2.08、亀2.11、居候とび助2.75などである。

芸者あだ文字は、あいさつ場面に少し顔を出すだけなので、文もきわめて短し、文の数も少ない。亀は「何ごとにもすてきすてきと口くせある」（初編上）男であるが、下の[例1]のように文が短い。

[例1] 「こいつはすてきと美しい。ナンダ 島縮緬揃ひに帯が厚板 やぼでねへ」
(初編上、p.271:12-13)

とくにまとまった話を、役としては与えられていないので文が短いものと思われる。

一方、一文平均文節数の最も長いのは、銭右衛門6.11、土竜6.05、金鳴やのお袋さん5.84である。[例2]の銭右衛門は話し好きであり、初老の訳知りの人物である。

[例2] スルト若者が出て、お定りのお腰物。お小柄がござりませんや何角で、ずっと渡して階子をバタバタバタ。ソレ 酒が出る。まづ飲む。ここでかなしくも内鯨舎でもあげようといふ場だが、其形かりですまして、チトお片付となつた。気のきかねへ撫牛で、蒲団のうへに煙草を吞居ると、若者が来て、へいお淋しうつぶつたから、ソリヤお勤を下やうとする。
(二編上、p.331:9-13)

銭右衛門は引用の会話文を所々にはさんで体験談を話すのが得意な人物である。

土竜は「ゑ入よみ本おを好みてかし本やより借本にて見る人尤封切は価が貫きゆゑずつとのあとで見人なり此人万事につきて今やうのよみ本文章をいひたがるくせいあり」（二編上）と評されている人物である。その口調は次の[例3]と[例4]のようである。土竜は周囲の人々からは高自慢な口ぶりとか、唐人の寝言などと悪口を言わ

16) 一文節文と二文節文は除外した場合である。

れている。普通の話し方ではない。

[例3] 裏門から退出した所が、和尚酔しれて泥たる声などで高やかに小唄を唄ひの、折々大きやかなる声でかやかやと笑て、何か独りでさえのめしの、浪々躑々として歩て来やした。話分両頭。こゝに渾名を白と呼る、あてはかなる少女がありやす。白と号るはいかにとなれば、……わつちは読本といふ読本を暗記てゐるから。つい平生の事もあの詞になつてどうもならねへ。

(二編下、pp.333:12-334:1)

[例4] わたしは話に実が入ると好物の読本風が出る。 (二編下、p.334:2)

女性で文の長い金鳴やのお袋さん([例5])は、これも話し方に特徴のある人である。

[例5] 宿でも一寸お見舞に参りたがつてゝございましたが、是も又おまへさんネ、お屋しきさまの御用が追々重りまして、イエサまことにまことにおまへさんネ、三度三度のお飯さへネろくろく落着てはくださいません程でございますのさネ。

(二編下、pp.353:17-354:2)

お袋さんについて、ちやほ八(皆からよくしゃべると言われている)でさえも「人に口をきかせずに。うぬひとり口をきいてポイと飯たぜ」(二編下)とあきれ程のしゃべり方である。現代でもこのような話しぶりの人に出会うことはある。

その他、話しぶりに特徴のあるのは[例6]の短八である。

[例6] 葬の時なんザア、べらぼうに世話アやきやアがつて、ひとりで捌くもんだから、大屋さんにきめられてナ、コレ貴様は何だ、あてこともねへ。親類に人もねへ様に、などゝいはれてナ、きび助寂滅。ぎやはんきうといふ目に遇つた。」

(二編下、p.337:11-14)

短八は[例6]のように間投助詞「な」を盛んにいれて文を長くするくせを持っている。

なお、これら文の長い人々(銭右衛門6.11、土竜6.05、金鳴やのお袋さんなど)は二編に登場してくるので、初編より二編が文が長いことの原因の一つは、ここにあると考えられる。

<表3> 発言者別の文の長さ

発言者	文	文節	一文 平均 文節数	発言者	文	文節	一文 平均 文節数
浮世床主 鬢五郎	593	2119	3.57	妻、お吉	94	344	3.66

＜以下 浮世床の客 (1)壯年17＞							
いさみ	53	270	5.09	でんぼう	181	577	3.19
熊	198	594	3.00	亀	83	175	2.11
短八	189	873	4.62	長六	216	801	3.71
松	104	337	3.24	竹	115	370	3.22
土竜	191	1156	6.05	蛸助	97	490	5.05
ちゃぼ助	189	702	3.71	居候とび助	100	275	2.75
銭右衛門	295	1820	6.17	芸者、あだ文字	53	110	2.08
＜(2)青年・少年＞							
徳太郎	91	319	3.51	聖吉	98	432	4.41
賢蔵	82	304	3.71	でっち	72	235	3.26
浮世床 小僧とめ	45	136	3.02				
＜(3)老年＞							
隠居	199	752	3.78	中右衛門	30	127	4.23
お袋さん	55	321	5.84				

＜表3＞でみるように、『浮世床』の登場人物を壯年、青年・少年、老年に分けたのは、年による文の長さの差を考察するためである。壯年の一文平均文節数は3.85であり、青年・少年の一文平均文節数は3.53、老年の一文平均文節数は4.61である。それほど目立つ差があるとは言えないが、老年の文の長さが長い傾向はあると言える。一文文節数が4.00以上の比率を調べてみても、壯年は約36%、青年・少年は20%、老年は67%で、老年がもっとも高かった18)。

Ⅲ. 話題と文の長さとの関係

『浮世床』は滑稽本というジャンルに属する、会話文を主とした文学作品である。この文学作品は、階級をほぼ同じにする職人や町人たちが三十何人も登場してくる。この人々が多少の敬意を持って応接しなければならないような階級の人のごくわずかしかが登場しない。会話文のほとんどはくだけた話しぶりで構成されている。次々に移る話題と、入れ替わり立ち替わり出てくる登場人物を三馬特有の写実の妙味によってうまくさばいて作品を展開させていく。

17) 『浮世床』に登場人物の年が明確に示されていないのがほとんどである。壯年(約30代から50代)、青年・少年(約10代から20代)、老年(約60代以上)に分けたのは、登場人物の役割、会話の内容、話しぶりなどの要素によって推測したものである。

18) 老年に属する話し手の人数が3人しかいないので、年齢による文の長さについての断定的に言えない。

われわれの日常会話において文の長さは、おかれた場所によって、話題によって、目的によって、人数によって、雰囲気によって、親しさの度合いによって、変化するものと考えられるし、年齢、性別、教養、地域あるいは個人個人の持つスタイルの相違によっても異なることは推察されるところである。

本論文のⅢ章では、二つの面に着目して文の長さを規制する要因を考えてみることにした。一つは話題を中心としたものであり、もう一つは、話題として切り取られた会話の中での話し手の役がらについてである。

Ⅲ－1。話題の種類

『浮世床』の話題を類似する性格のものは一つにまとめて、話題の種類と文の長さの傾向を見たいと思う。

まず、論を進めるため、話題の種類をその内容によって、次の〈表4〉のように10個に分けることにした。また、話題の種類によって、AからJまでの記号をつけておくことにした。つまり、〈表4〉は話題の種類別に分け、記号をつけたものである。そして、〈表5〉は〈表4〉の話題の種類に基づいて、『浮世床』の会話を話題によって分類し、それぞれの文を分析して一文文節数までを示したものである。

〈表4〉 話題の種類

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
話題	冗談	ぐち	悪口 嘲笑	口論	体験談	意見を 述べ合 う	他人の 行状を 語る	噂	売買	あい さつ

〈表5〉 話題の名称別 文の分析

話題 番号	話題の名称	発言者	文	文 節	一文 平均 文節 数	話題 の 種 類
1	隠居・とめ冗談 1	隠居・とめ	78	215	2.76	A
2	昨日の夫婦喧嘩	鬢五郎・いさみ	53	220	4.15	B
3	蜂の悪口	鬢五郎・いさみ	27	129	4.78	C
4	隠居・とめ冗談 2	隠居・とめ	37	107	3.46	A
5	孔糞の悪口	鬢・でんぼう・隠居	44	179	4.07	C
6	大学と今川	鬢・でんぼう・隠居	83	222	2.67	D
7	親孝行	鬢・でんぼう・隠居	76	416	5.47	F

8	遊びの失敗	鬢・でんぼう・隠居・熊	64	174	2.72	A
9	結婚の思い出	鬢・でんぼう・隠居・熊	24	119	4.96	E
10	隠居・とめ冗談3	隠居・とめ・熊	13	31	2.38	A
11	通り者談義	鬢・でんぼう・熊	52	137	2.63	F
12	熊の葬式	鬢・でんぼう・熊	30	125	4.17	A
13	色男談義	鬢・でんぼう・熊・亀	37	104	2.81	A
14	熊目かくしをされる	鬢・でんぼう・熊・亀	32	57	1.78	A
15	熊旦那にからかわれる	熊・旦那・でんぼう	32	67	2.09	A
16	熊の義大夫	鬢・でんぼう・熊・亀	63	254	4.03	G
17	仇文字のうわさ	鬢・でんぼう・熊・亀	15	21	1.40	H
18	仇文字愛想を云う	鬢・でんぼう・熊・亀	64	138	2.16	J
19	通る女の品定め1	鬢・でんぼう・熊・亀	51	165	3.24	F
20	菓子をかう	鬢・でんぼう・熊・亀・菓子売	44	88	2.00	I
21	近所の息子と鬢五郎 あいさつ	鬢・徳太郎・聖吉・賢蔵	19	25	1.32	J
22	櫛やにことわり	鬢・櫛八	18	26	1.44	I
23	女から来た手紙	聖・徳・賢	72	310	4.31	F
24	三人の争い	聖・徳・賢	86	316	3.67	D
25	通る女の品定め2	聖・徳・賢	42	134	3.19	F
26	女房について	聖・徳・賢	41	246	6.00	F
27	猫の名	鬢・長六・短八	108	261	2.42	F
28	息子についてのぐち	中右衛門・長・短	45	172	3.82	B
29	中右衛門親子のうわさ	鬢・長・短	23	136	5.91	H
30	遊びについて	鬢・長・短	21	139	6.62	F
31	でっちをからかう	鬢・長・短・でっち	58	189	3.26	A
32	そろばんはむずかしい	鬢・長・短・でっち	22	103	4.68	B
33	でっち悪態をつく	鬢・長・でっち	37	103	2.78	A
34	奉公人の運・不運	鬢・長・短	11	73	6.64	F
35	居候について	鬢・長・短	47	383	8.15	F
36	銭右衛門の悪口	鬢・長・とび助	113	310	2.74	C
37	とび助の悪口1	鬢・短	8	59	7.38	C
38	とび助の悪口2	鬢・長・短・銭右衛門	43	161	3.74	C
39	財産について	鬢・長・短・銭右衛門	28	172	6.14	F
40	いちこのうわさ	鬢・長・短・銭右衛門	38	120	3.16	H
41	変助の悪口	鬢・長・短・銭右衛門	26	121	4.65	C
42	芝居役者の話	鬢・長・短・銭右衛門	47	267	5.68	H
43	俳諧師の話	鬢・長・銭	23	114	4.96	G
44	松竹の争い	鬢・松・竹	33	119	3.61	D
45	口よせについて	鬢・長・短・松・竹・銭・お吉	71	167	2.35	A
46	女のやきもち	長・短・松・竹・銭・お	97	513	5.29	F

		吉・土竜				
47	神がくしにあったおじいさんのうわさ	鬢・長・短・松・竹・銭・お吉・土竜	55	148	2.69	H
48	おいらん上りの女房の失策	鬢・長・短・竹・銭・土竜	44	369	8.39	G
49	銭右衛門の失敗談	銭・土	41	431	10.5 1	E
50	馬陰の失策	鬢・長・短・松・竹・銭・土竜	144	870	6.04	G
51	お豆をはりにくる息子	鬢・長・短・松・竹・銭	22	256	11.6 4	C
52	戒名の長短	鬢・銭・土	76	492	6.47	F
53	髪結床について	鬢・松・竹・蛸助・ちゃぼ八	79	480	6.08	F
54	鳥を売る	鬢・松・竹・蛸・ちゃぼ	64	305	4.77	I
55	はやり貝	鬢・松・竹・蛸・ちゃぼ・でっち	51	228	4.47	F
56	読本を読む	鬢・松・竹・蛸・ちゃぼ	102	316	3.10	A
57	銅助来る	鬢・銅助	36	93	2.58	J
58	櫛の売買	鬢・櫛吉	35	65	1.86	I
59	そばをおごる	鬢・蛸・ちゃぼ	78	207	2.65	D
60	ごぶさたの言いわけ	鬢・吉・お袋さん	92	388	4.22	J
61	お袋さんのうわさ	鬢・吉・ちゃぼ・蛸	11	40	3.64	H

〈表5〉の分析結果に基づいて、同じ話題の種類のもを一つに合わせて整理すると、〈表6〉のようになる。

〈表6〉 話題の種類による文の分析

話題の種類	略称	文	文節	一文平均文節
冗談	A	591	1655	2.80
ぐち	B	120	495	4.13
悪口・嘲笑	C	283	1215	4.29
口論	D	280	864	3.09
体験談	E	65	550	8.46
意見を述べ合う	F	852	4179	4.90
他人の行状を語る	G	274	1607	5.86
うわさ	H	189	732	3.87
売買	I	161	484	3.01
あいさつ	J	211	644	3.05

〈表6〉にわかるように、『浮世床』全体の一文平均文節数(3.98)より長い4文節以上のものは、[E：体験談]、[F：意見を述べ合う]、[G：他人の行状を語る]、[C：悪口・嘲笑]、[B：ぐち]などであるが、これらは他のものにくらべて話が整理されやすい傾向があると思われる。それは過去において自分が見たり経験したりして、その事がらとか人物にある種の印象を持っているためであると思う。特に体験談や他人の行状について話す場合に文が長いのは、それを裏付けしていると言える。つまり、このような事がらについて話す場合には、話の種があらかじめ用意されているので、比較的整った話し方がされやすいということである。

Ⅲ-2. 会話における話し手の役がら

Ⅲ-2章では、会話における話し手の役がらと文の長さとの関係について考察する。考察のため、会話においての話し手の役がらによって三つのグループに分ける。

会話文は話し手と聞き手が交互にその役を変えて話し合うことによって進行する。ところで、ある種の会話では話題の展開の主導権を持っている話し手がいる。話し的主导権を持っている話し手によって話は進行し、他の者は相づちほどのことしか話さない。このような話し手が存在する会話を「第一グループ」の会話とする。

次に、「第一グループ」のような特定の話し手を持たずお互いが口をきき合いながら話題の展開する会話を「第二グループ」の会話とする¹⁹⁾。

次に、他の種類の会話で、中心になる人物はいるが、特に筋のある話題が展開されるというのではない、具体的に言えば、何人かの人に囲まれた中心人物が存在し、その中心人物が周囲の人々に、また周囲の人々から中心人物に、取り立てて言う程の筋を持たない話が交わされる場合がある。たとえば、何人かにかからかわれている場面とか、挨拶の交換などである。このような中心人物のいる会話を「第三グループ」の会話とする。

〈表7〉はグループ別にどの話題がどのぐらい配置されているかを把握した表である。また、〈表8〉は「第一グループ」の会話で、話し手の一文文節数を調査した表である。

〈表7〉 グループ別 話題

グループ名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
話題	冗談	ぐち	悪口嘲笑	口論	体験談	意見を述べ合う	他人の行状を語る	噂	売買	あいさつ	計

19)話し手の人数、聞き手の人数は対一の場合もあるが複数の場合もある。しかし、今回はこれについては配慮しなかった。

第 1 グループ	5	3	5	1	2	6	4	2	1	1	30
第 2 グループ	4		2	3		9		3	3	1	25
第 3 グループ	3							1		2	6
計	12	3	7	4	2	15	4	6	4	4	61

〈表8〉 第一グループ

話題 番号	話題	種 類	話し手 一文平均文節数	聞き手 一文平均文節数
1	隠居・とめ冗談1	A	隠2.54	とめ3.85
2	昨日の夫婦喧嘩	B	いさみ4.69	鬢3.33
3	蜂の悪口	C	いさみ5.71	鬢1.50
4	隠居・とめ冗談 2	A	隠2.96	とめ3.50 でん2.50
5	孔糞の悪口	C	でん5.42	鬢2.53 隠4.67
6	大学と今川	D	鬢2.76 でん2.44	隠3.00
9	結婚の思い出	E	隠5.00	鬢2.80 熊1.36 でん2.10
12	熊の葬式	A	熊4.94	でん2.75 鬢4.00 亀3.00
13	色男談義	A	熊3.37	鬢1.89 でん2.33 亀2.67
16	熊の義大夫	G	鬢8.30	でん3.00 熊3.75 辰1.89 亀2.25
19	通る女の品定め	F	魚2.52 熊3.87 でん3.73	鬢3.73
26	女房について	F	聖6.95 賢7.88	徳3.38
28	息の子ぐち	B	中右4.23	長2.75
32	そろばん	B	でっち5.77	長2.33 鬢2.00
36	銭右衛門の悪口	C	飛助2.75	鬢2.33 長3.50
38	飛助の悪口	C	銭右4.43	鬢2.25 長3.00
40	いちこのうわさ	H	鬢4.14	銭2.27 長2.75 短3.00
42	芝居役者のうわさ	H	銭右6.72	鬢4.33 長2.83 短3.00
43	俳諧師のうわさ	G	鬢7.42	銭2.30
46	女のやきもち	F	土竜4.65 お吉5.32	銭3.38 松5.00 竹4.40 短3.25 長3.80
48	おいらん上りの女房	G	土8.77 鬢5.40	短3.45

	の失策		銭11.38	
49	銭右衛門の失敗談	E	銭10.63	土1.22
50	馬陰の失策	G	土7.21	松2.00 長2.20 竹4.20 鬢1.83 短3.67 銭4.17
51	お豆をはりに来る息子	C	短13.93	銭4.00
52	戒名の長短	F	銭6.63	土4.75
53	髪結床	F	鬢6.24 蛸8.26	松5.17 竹3.69 ちゃぼ2.67
54	鳥を売る	I	ちゃぼ5.12	蛸3.33 竹2.20
55	はやり貝	F	蛸6.19	ちゃぼ3.48
56	読本を読む	A	ちゃぼ3.54	松2.20 竹2.20 鬢2.63 蛸3.15
60	ごぶさたの言いわけ	J	お袋5.84	鬢1.69 お吉1.90

<表8>によれば、聞き手より文の短い話し手の存在する話題は、話題番号で1番・4番・6番・19番・36番の五つであって、他はすべて話し手の方が長い。

話しの主導権を持って話しを進行させるそのような話し手が存在しないと、話自体が行われにくい[E：体験談]・[G：他人の行状を語る]・[F：意見を述べ合う]・[C：悪口・嘲笑]・[B：ぐち]などでは、話し手の文が特に長い。

また、「第一グループ」の話し手は延38人であるが、発言者別の一文平均文節より短いのは8人であり、長いのは27人、同じなのは3人である。話し手になる場合は、文の長さが長くなる傾向が見られる。

「第一グループ」の会話には、割合からいうと、初編は初編全体の話題の40%、二編は70%が含まれていて、二編の方が圧倒的に多く含まれている。この点にも初編より二編の長い要因が見られる。

<表9>は[第二グループ]の会話で、話し手(相互)の一文文節数を調査した表である。

<表9> 第二グループ

話題番号	話題	種類	話し手(相互)
7	親孝行	F	隠居6.03 でん4.13 鬢5.49
8	遊びの失敗	A	熊2.64 でん3.14 鬢2.27
10	隠居・とめ冗談Ⅲ	A	隠2.38 とめ2.40

11	通り者談義	F	熊3.28 でん3.13 鬢3.21
15	熊が旦那にからかわれる	A	熊2.46 旦那1.80
20	お菓子をかう	I	亀1.47 でん2.00 菓子売1.89 熊3.00
22	櫛や来る	I	櫛八1.55 鬢1.29
23	女から来た手紙	F	聖吉3.67 賢蔵3.20 徳太郎5.62
24	三人の争い	D	聖吉4.15 徳太郎3.18 賢蔵3.70
25	通る女の品定め	F	徳2.10 賢2.73 聖4.11
27	猫の名	F	長六2.32 短八2.53↓
29	中右衛門親子のうわさ	H	鬢5.60 短4.00 長8.50
30	遊びについて	F	鬢7.91 長6.67 短3.00
34	奉公人の運・不運	F	長6.00 鬢6.25 短8.00
35	居候談義	F	鬢5.76 長10.75 短8.67
37	飛助の悪口	C	鬢7.50 短7.25
39	財産	F	銭6.00 鬢7.00 長7.25 短5.20
41	変助の悪口	C	銭4.14 鬢6.25 長3.17
44	松竹の争い	D	竹3.38 松4.31 鬢2.25
45	いちこ口よせ	A	長2.67 竹3.78 銭1.25 鬢2.75 松2.68 短1.50 お吉2.00
47	神かくしにあったじいさん	H	松2.13 長4.00 銭4.25 お吉2.00 竹1.70 短2.75 土3.18 鬢1.60
57	銅助来る	J	銅2.50 鬢2.75
58	櫛を売る	I	櫛吉1.46 鬢2.09
59	そばをおごる	D	蛸2.57 鬢3.00 ちゃぼ2.69
61	お袋のうわさ	H	蛸3.00 ちゃぼ3.83

この〈表9〉からわかるように、ここにはあまり傾向的なものはみられなかった。しいて言うならば、話し手相互がほぼ同じぐらいの文の長さで話すもの²⁰⁾が15個(話題番号、7番・8番・10番・11番・15番・20番・22番・27番・37番・39番・45番・57番・58番・59番・61番)、違うものが10個であり、話し手相互が平均しているものがやや多いこと、意見を述べ合う場合(F)は概して文が長いこと(平均5.04²¹⁾)などがあげられる。

²⁰⁾もつとも文の長い人とその次に文の長い人との一文文節数の差が1.03以下であるもの。

²¹⁾意見を述べ合う場合(F)に属する文は第二グループで9個あった。話題番号によって、それぞれの文の一文文節数の平均を示すと、7番(5.20)、11番(3.21)、23番(4.16)、25番(2.98)、27番(2.43)、30番(5.87)、34番(6.75)、35番(8.39)、39番(6.36)である。そして、この9個の平均一文文節数は

<表10>は[第三グループ]の会話で、中心人物と周囲の人物の一文文節数を調査した表である。

<表10> 第三グループ

話題番号	話題	種類	中心	周囲
14	熊目かくしをされる	A	熊1.67	でん 1.17 鬢 2.00 亀 2.33
17	仇文字のうわさ	H	熊1.33	でん 2.25
18	仇文字愛想を言う	J	仇2.08	熊 2.50 亀 2.00 鬢 2.33
21	近所の息子たちと鬢五郎のあいさつ	J	鬢1.43	徳 1.33 聖 1.00 賢 1.25
31	でっちをからかう	A	でっち2.75	長 4.50 鬢 3.38 短 3.55 とめ 3.25
33	でっち悪態をつく	A	でっち2.77	鬢 2.26 長 1.07

「第三グループ」に所属する会話は少ないが、それらは冗談くちをたたき合うとか、あいさつとか、うわさ(中心の熊が冷かされ気味の)をしている場面で、かなり限られている。話題というほどの話題はどれにもない。話題ではなく、からかわれている場面とか、あいさつの場面とか、悪態をつく場面というような場面として捉えられるといったものである。このグループの会話は多人数であり、中心人物のいるのがその特徴である。このような性質の会話は中心も周囲も概して文が短いと言えよう。

IV。結び

近世後期の滑稽本『浮世床』の会話文の分析を行った。今回の分析から次のような結果が得られる。

まず、『浮世床』の会話文の一文平均文節数は3.98である。『浮世床』の会話文の

文の長さは現代(3.81)より少し長い、それほど差はない。つまり、近世の会話文の長さは現代の会話文の長さに近接していたことがわかる。

次に、『浮世床』の発話者別の特性によって、文の長さの差が存在した。『浮世床』の主鬢五郎は、一文平均文節数は3.47であり、『浮世床』全体の平均3.98より少し短いが発言者の中ではこの平均値に最も近い一人であった。一文平均文節数の最も短いのは、あだ文字2.08、亀2.11、居候とび助2.75などである。一方、一文平均文節数の最も長いのは、銭右衛門6.11、土竜6.05、金鳴やのお袋さん5.84である。文の長さは話し手の話ぐせによって、左右される傾向があった。

また、話題の内容と文の長さとの関係について調査した結果、一文平均文節数が4文節以上の話題は、[体験談]、[意見を述べ合う]、[他人の行状を語る]、[悪口・嘲笑]、[ぐち]などであった。このような事からについて話す場合には、話の種があらかじめ用意されているので、比較的に長く整った話し方がされやすいということである。

最後に、会話文にける話し手の役がらと文の長さの関係について考察した。考察の際、会話の話し手の役がらによって、三つのグループに分けた。そして、話し手が話しの主導権を持って話を進行させる「第一グループ」の会話で、話し手の文の長さが長くなる傾向が見られた。

『浮世床』は文の長さも文の分布の状況も現代の会話文に近いという結果がみられたのである。『浮世床』に江戸語が忠実に写実していることから推してみると、く江戸の庶民の会話は、われわれの文の長さときほど違いがないと言える。

また、この調査から、文の長さが、話題・話し手の話ぐせ、話し手の役がらなどによって左右されやすいことも見る事ができた。

なお、『浮世床』において、限られた階層の人々についてしか見られなかった。武士あるいは教養層といった階層の人々の文の長さはどのようなものであるかは今後の課題にする。

【資料編】

中野三敏・神保五弥・前田愛注(2000) 『洒落本・滑稽本・人情本』新篇日本古典文学全集80
小学館

【参考文献】

- 石野博史(1972) 「文の長さ ローカルニュース文章の分析」 文研月報22-11 日本放送協会放送文化研究所 pp.12-31
- 岩淵悦太郎(1967) 「新聞文章の変転の方向」 新聞研究195 日本新聞協会 pp.5-22
- 樺山忠夫(1953) 「文の長さについて一条件との相関の分析一」 国語学15 p.24
- 国立国語研究所編(1955) 『談話語の実態』 国立国語研究所報告8 国立国語研究所 pp.7-9 p.52
- 『談話語の実態』 国立国語研究所報告8 国立国語研究所 pp.52-70
- 鈴木一彦(1998) 『文の認定と文の長さ—平安初期から鎌倉初期まで—』 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 汲古書院 pp.32-46
- 瀬川武美(1984) 『志賀文学における文の長さの変化 即物性との関係において』 帝塚山学院大学研究論集19 帝塚山学院大学 pp.11-29
- 築島裕 (1987) 「橋本文法」 『国文法講座』 明治書院 p.48-49
- 長田久男(1960) 「こども漫画に多い話し方」 言語生活107 筑摩書房 pp.24-42
- 野尻久美子(1972) 『樋口一葉と「たけくらべ」 会話の表現と一文の長短』 解釈18-09 pp.36-51
- 和田弘名(1997) 『「伊豆の踊子」における文の長さの規則性』 青須我波良53 帝塚山短期大学 pp.137-143

要 旨

滑稽本『浮世床』の会話文の分析を行った。今回の分析から次のような結果が得られる。

まず、『浮世床』の会話文の一文平均文節数は3.98である。『浮世床』の会話文の文の長さは現代(3.81)とそれほど差はない。つまり、近世の会話文の長さは現代の会話文の長さに近接していたことがわかる。

次に、『浮世床』の発話者別の特性によって、文の長さの差が存在した。『浮世床』の主鬢五郎は、一文平均文節数は3.47であり、『浮世床』全体の平均3.98よりは短い。発言者の中では平均値に最も近い一人であった。一文平均文節数の最も短いのは、あだ文字2.08、亀2.11、居候とび助2.75などである。一方、一文平均文節数の最も長いのは、銭右衛門6.11、土竜6.05、金鳴やのお袋さん5.84である。

また、話題の結果と文の長さとの関係について調査した結果、一文平均文節数が4文節以上の話題は、体験談、意見を述べ合う、他人の行状を語る、悪口、嘲笑、ぐちなどであった。このような事からについて話す場合には、話の種があらかじめ用意されているので、比較的長く整った話し方がされやすいということである。

最後に、会話文にける話し手の役がらと文の長さの関係について考察した。考察の際、会話の話し手の役がらによって、三つのグループに分けた。そして、話し手は話しの主導権を持って話を進行させる「第一グループ」の会話の話し手の文の長さが長くなる傾向が見られた。

『浮世床』は文の長さも文の分布の状況も現代の会話文に近いという結果がみられたのである。江戸の庶民の会話は、われわれの文の長さときほど違いがなかったと言える。

また、この調査から、文の長さが、話題・話し手の話しぐせ、話し手の役がらなどによって左右されやすいことも見ることができた。

キーワード：『浮世床』、文、文節、話し手、話題

투 고 : 2014. 8. 31
1차 심사 : 2014. 9. 13
2차 심사 : 2014. 10. 4